

第一朗読：知恵の書(知恵1・13-15、2・23-24)；悪魔のねたみによって死がこの世に入った
答唱詩編(詩編30・2b+4、6、11+12)；神はわたしを救われる。そのいつくしみをたたえよう。
第二朗読：使徒パウロのコリントの教会への手紙(二コリント8・7、9、13-15)；あなたがたのゆとりが他の人々の欠乏を補う
アレルヤ唱：(二テモテ1・10参照)；わたしたちの救い主イエス・キリストは死を滅ぼし、福音によって生涯を照らしてくださった。
福音朗読：マルコによる福音(マルコ5・21-43)；少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい

今日の福音では、イエスを信じる者として「ヤイロ」という会堂長と12年間も出血の止まらない女性が登場します。この二人は、どちらもイエスが来たことを知り、イエスの力を信じて行動に移します。イエスなら自分の幼い娘をいやしてくださるとヤイロは信じ、イエスならこの自分をいやしてくださると女性は信じているのです。この二つの物語の構成を見ると、ヤイロの娘の物語の間に挟まる形で、イエスの服に触れる女の物語が置かれています。

まずこちらの女性の物語を見ていきましょう。マタイによる福音にもルカによる福音にもこの二つの物語は描かれていますが、マルコによる福音が最も詳しく豊かに描かれています。この女性がイエスに近づく描き方が非常に細かいのです。

「女がいた」
「ひどく苦しめられ」
「全財産を使い果たして」
「役に立たず」
「悪くなるだけで」
「聞いて」
「紛れ込み」
「触れた」

彼女の12年間の苦しみが描かれています。これらはギリシャ語本文では1つの文章となっています。「触れた」以外の動詞はそれまでの彼女の状況や行動を示しています。「イエスの服に触れた」に至るまでの彼女の長い道のりを示しているのです。絶望の内であった彼女がイエスのことを聞いて、イエスの力を信じて、ようやくここまでたどり着いたのです。

イエスの服に触れたこの女性は自分の身に本当にいやしが起こった、健康を回復したことを自覚しました。イエスは同時にこの女性のことにも気づきました。イエスはこの女性が単に健康を回復しただけにとどまらず、イエス本人とのかかわりや対話の中で救われることを伝えたかったのだと思います。イエスの思いはすべての人を救うことにあり、それは死者を生き返らせたり、健康を回復させたりするにとどまらず、わたしたちの心を貧しさから豊かさへと変えて行くことにあります。ヤイロの娘の物語の間にこの女性の救いが置かれているのはそういう意味があります。

彼女をイエスのところまで導いたのは何だったのかということ、彼女と対面したイエスがことばにしています。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。もうその病気に かからず、元気に暮らさなさい。」イエスの救いの力を信じる彼女の信仰が彼女を救ったのです。それを直接イエスから聞いて彼女は救いを感じたことなのでしょう。いつも神は、ご自分に似たものとして造られた人間を、死の滅びから救い、永遠のいのちに導きたいと望んでおられます。もちろん、彼女を救ったのは神ですが、救われるためには信仰が必要なのです。信仰がなければ、言い換えればわたしたちの心が神に向いていなければ、神はわたしたちを救うことができないのです。

ヤイロの娘の物語では「わたしの幼い娘が死にそうです」という会堂長ヤイロのことばから始まります。「どうかおいでになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう。」この時点でまだ生きていたことがわかります。ヤイロと一緒に出かけますがヤイロの家から人々が出てきて娘が死んだと告げました。この娘が死んだのでは、イエスが来てももう遅いと人々は思っていたのでしょうか。ところがイエスは「恐れることはない。ただ信じなさい」と父親であるヤイロに言います。このことばを導くために、先ほどの女性の話が置かれているのです。イエスの救いの力は単に病気を治すだけではないのだということを示すためです。神の力を信じることは、死という滅びをも越えて復活へと導いていくものなのです。

イエスは子どもの手を取って、「タリタ、クム」と言います。イエスの呼びかけに、少女は起き上がりました。女性も少女もイエスに触れていやされ、イエスを信じることによって神からの救いがあることを知りました。イエスを信じること、イエスに触れること、これがわたしたちにも必要なことなのです。信仰とは、どんなに困難であってもどんなに暗い闇の中にも、いつかはきっと光が見いだされるという希望を持ってイエスに願い求め続けるものです。今日のみことばを通して、イエス・キリストとの深い交わりをわたしたちも持つことができるよう、ともに祈り求めてまいりましょう。